

小さな公立高校の野球部員が教えてくれた「普通であること」

□加高等学校長 狩野 博臣

みなさんは長崎県西海市大島町という町をご存知でしょうか。人口は約5,000人。本校がある□之津町とほぼ同じぐらいの人口の町です。現在は西彼杵半島と大島町は橋で結ばれていますが、以前はフェリーで行き来する島でした。

その町に全校生徒114人の県立高校があります。長崎県立大崎高校。10月6日、九州地区高校野球長崎大会決勝で創成館高校を4対2で下し、58年ぶりに優勝しました。全校生徒数は創成館高校の野球部員数よりも少ない、小さな学校です。ひたむきに野球と向き合い、地道に努力を重ね、チーム一丸となって勝利を目指してプレーする。どこにでもいる“普通の”高校生たちが成し遂げた快挙は、多くの高校生に「自分もやれる！」という夢や希望を与えてくれました。

大崎高校の生徒たちの活躍に、ある詩を思い出しました。かつて甲子園に初出場し、名だたる私立の強豪をなぎ倒してベスト4まで勝ち上がった無名の公立高校がありました。埼玉県にある浦和市立浦和高校。49代表のうち地区予選のチーム打率は最低。普通の高校生の体格を持った選手ばかり。スーパースターなし。作詞家の阿久悠さんが甲子園での初勝利を称え、あるスポーツ紙にこんな詩を寄せられています。

『普通であること』

**普通の人が確実に普通のことをやり、普通に徹することで
特別をしのぐ結果になることをきみらは鮮やかに証明してみせた。
怪物もいない、大器もない、怪童も天才もましてや野球の鬼も見当たらない。
普通の体躯（たいく）の普通の技の普通の少年たちが華やかさを捨てて地味に
大きさを捨てて確実に、幻想を捨てて現実に
そう、出来る事を出来るように臆することなく素直に出して
晴れ舞台での華やかな一勝を得た。**

また、かつて徳島県立池田高校という高校野球の一時代を築いた高校がありました。徳島県の山あいの池田町にあり、どこにでもあるごく普通の公立高校です。部員数わずか11人。甲子園に初出場し、見事準優勝したのです。その後、甲子園大会で春夏合わせ3度の全国制覇を果たし、高校野球史に残る名門校となりました。

そうです。やればできるのです。「どうせ自分は」とか「自分には無理」と思っていないませんか。目標を低めていませんか。夢をあきらめていませんか。可能性をつぶしていませんか。ちなみに大崎高校は、3か月前の夏の甲子園大会の長崎県予選では1回戦で負けています。「やればできる！」ということを先輩たちが証明しています。

□加高校では、日々“普通の”高校生たちが学習や部活動にひたむきに取り組んでいます。“普通の”ことを“普通に”繰り返し、“普通に”積み重ねていくことで“今の私”を超えていく・・・そんな生徒を□加高校は育てたいのです。

□加高校 いざ、新時代へ！ 「私」を咲かせたい、だから□加